

## 77・久しぶりにキーボード(大寒の朝)

少し朝寝坊し寢室の遮光カーテンを普段どおり開いた。強烈な暖かい太陽光が差し込んできた。

ええ、少し違う、何かが違う？ 窓を開けても全然寒くない！ 真冬の朝の筈なのに窓を閉めるのが惜しくなってしまった。(一時間ほど解放した)

階下に降りて新聞を広げると一月二十日「水曜日」大寒、その下の天気予報欄にはヨコハマの日は真つ赤な太陽、夜は星になっている。気温は十八度だ。横浜だけではない上は水戸から下の静岡まで同じ、どうやら関東一円が今日は大寒なのに暖かい春らしい。

ふと思いい出し娘にケイタイメール。天も祝っているようなまさに最良の小春日和のバースデイ！ おめでとう、これからも健康第一、明るくガンバレよ

PCのキーボードはブラインドタッチ(少し自慢)のシニアとしては、ケイタイのメール作成は面倒で時間が掛かる。でも、やはり便利なもんじゃ、使わにゃ損かもしれない。

テーブルの上に、妻が昨日買ってきたという孫のスニーカーが私を見ているように正座している。白と黒と黄色のデザインに魅(見)入ってしまった。手に取るとアツと言うほど軽い！ 最近めつきり手の筋肉も弱くなって来た筈なのにほとんど重さを感じない。百グラム位か、妻は二百グラムと言う。そんなら量ってみようと体重計を持ってこようとすると私を、妻が笑いながらストップをかけ、料理秤を持ってきてテーブルに置いた。さて、興味津々。結果は三百グラムで妻の方が近い。腕の筋肉だけでなく頭の筋肉も弱くなりカンが大分鈍ったことを再認識した。それにしても最近の子どもはしあわせだねえとつぶやいてしまった。

高校時代約二時間の電車通学に下駄を履いていたものだ。最初は高下駄でガタガタゴトゴトと、その内世の中の志向が少し変化し、スマートな女下駄が流行り出したものだった。孫と同じ年頃の頃は、夏祭りに下駄を新調してもらうのが殊更嬉しかったことを思い出す。妻に化石みたいな人だわねくと大声で笑われた。私の生まれは豪雪の魚沼盆地、妻は雪の無い関東平野、昔は今よりもっと格差社会だったのだと思う。まあ、しゃーないか。

今は笑って話せる時代になったことに感謝だ。

一九七〇年代後半、欧米の独壇場であったマレーシア全国に無線システムを納入することになった。これだけ大量の通信機器を輸出するのは画期的なこと、工場に整列した時は歓声を上げたほど美しかった。船積み機器が現着したとの連絡を受け、直ちに着荷検査と現地指導のために出発した。検査を始めると思惑通り事が運ばない。性能や動作の問題児がどンドン溜まり、土日を修理に当てるしかない。しかし、この国は英国の影響を受け休日出勤は無い、休日は家族と過ごすことに決まっているらしい。困った！ どうしても彼らの協力が必要だ。

歳は三十才位、浅黒く引き締まった顔にヒゲが実に似合う温かい目をしたエラヒという男がいた。握手する時必ず右手を胸に当て、微笑みながら相手の名前を呼びガシツとやる人で、よく冗談を言っては周りを笑わせ警察ワークシヨップでは実に存在感がある。小さな子供も居た彼がグループを代表していつも休日を手伝ってくれることになった。彼は必死に修理する私の側に来てはニコニコと声を掛けた。

「ハイ！ タムラ、大丈夫か」

「エラヒさん、このセットどうしても駄々をこねる、何かグッドアイデアない？」

私は親しさを込め、半分冗談ぽく言った。

「え！ 俺に聞くの」

「だって貴方はマレーシア警察のグッドエンジニアでしょう」

「オーケイ、貴方がそう言うなら一つ提案しましょう。ケースをチェンジしてみては」

何とふざけた提案だと思わず笑ってしまったが、今や親交も深まっていた彼の案である無視もできない、時間の無駄かとも思いつながら二人でプラスチック製のケースを別の物と取り替えた。二人仲良く性能チェックするとビックリ仰天、規定通りの性能が出るではないか、嘘みたいだ。彼は難しいことを考える前に感じたのだろうか、参った！ 高々と笑いながら手を叩く彼に一本勝ちを取られたようだ。笑いながら彼の功績を称えると、

「タムラ、昔私のおじいさんと君のおじいさんがケンカしたよね。今日は私のアイデア勝ちだオーケイ！」

一体何を言っているのだろうか？ ああ、あの戦争のことかと気づき、彼のあつげらかんとさり気ない明るさに親しみが倍増してしまった。その後、ロジック回路の塊みたいな機器が二台どうしても思うように動作しないで頭を抱えていると、彼が又微笑みながら、

「腹が減ってない？ 腹が減っていると機器も思うように動かないものだよ。私も腹が減ってきたから取りあえず昼飯にしようよ」

相当減入っていた私は苦笑しながら従うことにし、皆で構外の屋台で質素な

飯を食いながら頭を休めた。少しブルーな気分ですら修理を再開すると、何と実にスムーズに動作するようになり重症が直ってしまったのである。彼は大きな声で笑い転がっている、今度は一本背負いを取られた感じだ、でも歓喜の一本だった。あつという間の二週間、プレッシャーを感じながらの厳しい作業であったが、厳しい時こそ真心が身にしみるものである。

仕事も無事完了した帰国三日前、何か心が騒ぎこのまま帰れないと思った。どうしても彼にもう一度お礼とサヨナラを言いたいと思ひ、彼の住所を頼りに捜し歩いた。狭い部屋であったが小奇麗に整頓されており、突然の訪問にもかかわらずニコニコと上半身裸でバティックの腰巻姿で迎えてくれた。奥さんも交えお茶を頂き談笑、帰り際に彼が言った。

「いろいろ指導してくれてありがとう、一緒に作業できて楽しかったよ。お互い遠い国に住んでいるが元気でがんばりましょう。又近いうちにマレーシアに来るのを待ってるよ、気を付けて帰って。バイ」

手の平のぬくもりと柔らかさに共に汗を流した日々が思い出され、玄関の外で手を振りながら見送られ何か無性に別れが辛く切ない。私はエラヒとこの国の人達と絶対戦争はしたくないと思った。

任務を終え帰国し一ヶ月経った頃、エラヒから絵葉書が届いた。椰子の木の白い砂浜で二人の少女が貝殻を拾っている姿、青緑色の海の直ぐ向こうに緑の山が迫るところを見ると、何処かの入り江にちがいない。いつかこの街を家族で訪ねてみたいと心底思った。

それから数ヶ月が過ぎ、営業から突然悲しい電話が入った。マレーシア警察本庁は緑の大木が茂る丘の上にあるが、秋の台風により構内の古い大木が急に倒れ、何とあのエラヒが不運にもその下敷きになってしまい、内臓破裂でほぼ即死だったとのことである。こんな悲しいことが急に起こっていいものか、あのエラヒが……受話器をそっと置き、デスクに向かいペンを握ったまま涙を止めることが出来なかった。

人の死とは無情なものだ、もう会いたくても会えない。出会った者はいつか必ず別れが来ることは知っている。でも、あのエラヒとこんな形で別れが来るとは思ってもいなかった。

今でも絵葉書のペン字を見ると、あの頃が昨日のように思い出され辛い。できることなら彼の笑顔にもう一度ありがたうを言いたかった。

## 79・国勢調査 (2010.10)

今まで国勢調査に全くと言って良いほど関わりがなかったが、五年毎に実施していて今回は十九回目だと改めて知った。

町内会の役員になったことで、今回は否とも言えずどっぷり首まで漬かることになった。九月一日付で総務大臣（原口一博）の国勢調査員任命証書が届き、二ヶ月間の非常勤国家公務員になった。サラリーマンを卒業したが、今さら公務員

になるとは夢にも思ってもいなかったもので、少し緊張しながら配布された公務員、調査員としての心得を真面目に熟読した。

区役所での説明会を二時間受けたがマニュアルの複雑さに少し意気消沈、ケイタイの部厚い取説を見て余りフアイトが湧いて来なかったことを思い出す。まあ、何とかなるだろうと思った。その内に、大きなダンボールでドサツと多種多量の書類が届いてビックリ。国勢調査には指導員が十万人、私のような調査員が七十万人で全国約五千万世帯を調査するらしいが、費用は約六百七十億円（地方自治体の職員労働時間は別）掛かるとのことである、何となく納得できるダンボールの大きさと重さであった。

まずは地図を頼りに担当地区の巡回をし、建物と居住者の有無を確認し、二世帯かどうかの確認もしながら地図上に世帯番号をつけた。つまり、これは準備作業である。その後、一軒一軒訪問し調査票を配布するのだが、留守が多く思うようにはかどらない。曜日や時間を変えて三回訪問しても会えない場合は、ポストに資料を入れても良いことになっている。だんだん嫌気がさしてくるが短期間でも一応国家公務員である、ごまかすことは出来ない。全員が調査票を郵送してくれば良いのだが、世帯によっては回収依頼もあり、中には日時指定もあり大変である。さて、ここまで五回巡回したことになるが、十日もすると今度は役所から郵送受領した世帯番号の連絡があり、未提出世帯があった場合は再度回収に訪問しなければならない、多分また留守が多く手を焼くことだろう。

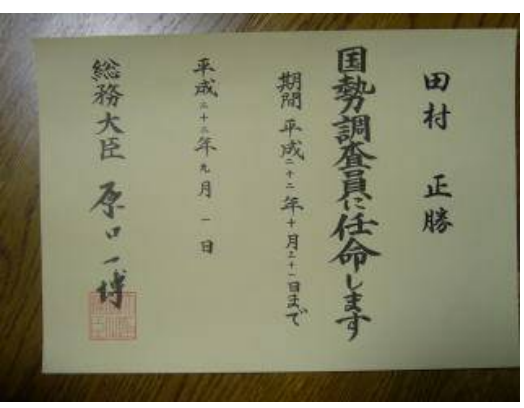
多分初回の大正九年以来、似たような方法でやっているのであるが、もともと近代化し、実施方法を変えて人間も資料も時間も少なくし、大幅な費用削減を出来ないものかと心底思った。たとえ今は難しくとも将来は実現すべきことだと思う。

興味本位で人口十倍の隣国中国ではどうしているのかネットで検索すると、中国では第六回の国勢調査が十一月から始まり、十三億以上の人口状況を詳しく調査するらしい。三年かけて実施される今回の調査経費は約八十億元、一元十五円とすると千二百億円となる。人口一人当たりは訓練費や用紙も含んで六元となり九十円である。同じように計算すると日本は約五百二十五円（役所の人件費は別、人口一億二千七十七万人／2006年）となるが、高いのか安いのか？ 今の私には何とも言えない。

できれば次回の国勢調査には参加を遠慮したいと思う。

## 80・おじぎ (2010.10)

参議院選挙後の私の好きな国会が始まった。本会議の質疑応答を観ていたが与野党の質問者も回答する各大臣も多少の差は在るが六回おじぎすることに改めて気がつ



いた。

壇上に上がった時、国旗に向かい一礼、議長に一礼、議場に居る全国会議員に向かい一礼。質問や回答が終わり帰る時にも同様に三回おじぎをする。今まで何気なく観ていたが、欧米やアジアの他国の国会はどうしているのだろう。少し興味が沸いてきたが、もし知っている人が居たら教えて下さい。

妻と高島屋デパートに行き、自分の興味本気でふらふらしていたら妻を見失ってしまった。

何処に居るのだろうかと見回していたら面白い光景に遭遇した。社員控え室の出入り口があるが、入っていく人は入る前に派百八十度回転し、売り場に向かい一礼していた。出てきた人も一礼した後に売り場に向かって行く。興味が沸いた私は約六、七分間見入った。なぜかと言うと、誰か一礼（おじぎ）をしない人が居るのではないか、絶対一人や二人は居るに違いないと思った訳だ。三十人近い人が出入りしたのだろうか、驚いたことに一礼しない人は一人も居なかった。びっくり、さすが一流会社、高島屋だと感心した。

帰宅後、まだ余韻が残っていたので高島屋に電話した。

「大変興味あり、感心いたしました。どのような意味を込めて一礼しているのでしょうか？」

「先ず自分に対し身を引き締めるためであり、お客様に対して感謝の心を込めて一礼しております」との回答を頂いた。

確かに心を伝えることは大切であり、心で思っても伝わらなければ駄目である。身についた自然な動作として社員全員が励行しているのだと改めて感心した。

## 81・我が町内のグローバル会社 (2010.10)

地元の小高い丘上に旭硝子研究所があります。その昔、今上天皇が若い時に見学に来られたとのことであるが、まだ舗装されていない道路で町民が国旗を振って迎えたものだと聞いている。

毎年秋の頃に、地域町内会との交流会が行われ、会社や業界の現況の説明やエコガラス、防犯ガラス、その他の新開発状況を展示室で見学できる。

今年も参加し面白い話を聞いた。

・周辺住民からクレームが来る前に問題解決するように努めているが、その一環として周辺の騒音測定を定期的なパトロールして実施している、この秋の時期は「虫の鳴き声」が大きくて、測定が困難、苦勞しています。

(いろんな苦勞があるのだと笑ってしまっただ)

・今回は屋上見学もあり、屋上から東京に建設中のスカイツリーを観ようと言う企画があった。参加者全員ワクワクしながら屋上に行くと、思わず歓声が出るほ

どの絶景である。三十年ほど前に一度来たことがあるが実に素晴らしい、横浜が三百六十度見渡せるのである。望遠鏡が設置され準備万端であったが、その日は薄曇で遠方がハッキリせず、スカイツリーは断念した。

帰りのエレベータの中に箱があり、何かと尋ねると「災害時にエレベータが止まった場合の非常食、水、が入っています。そして、これはトイレにもなるんです」(最近の防災対策はここまで徹底しているのかと、びっくりしたり感心した)